

# 八中3年人権だより

徳島市 八万中学校  
3年生 第18号  
2024年11月 5日  
編集・文責 吉成正士

いよいよ最後の学年全体人権学習となりました。最後の資料は、「わたしの願い」にある丸岡忠雄さんが書かれた詩、「ふるさと」です。

ふるさと  
父は けもののような鋭さで覚えた  
「ふるさとをかくす」ことを  
「あばかれ」  
「けものような鋭さ」とはどのようなものか。  
「あばかれ」とはどのようなことか。  
「吾子よ」の呼びかけの中に、父のどのような思いが読み取れるか。  
「胸張って」とはどのような心持ちか。  
名のととはどのような心持ちか。  
「瞳をあげ 何のためらいもなく」とはどのような心持ちか。  
「これが私のふるさとです」と名のらせたい親の思いとはどのようなものか。

「ふるさとをかくす」ことを  
「あばかれ」  
「けものような鋭さ」とはどのようなものか。  
「あばかれ」とはどのようなことか。  
「吾子よ」の呼びかけの中に、父のどのような思いが読み取れるか。  
「胸張って」とはどのような心持ちか。  
名のととはどのような心持ちか。  
「瞳をあげ 何のためらいもなく」とはどのような心持ちか。  
「これが私のふるさとです」と名のらせたい親の思いとはどのようなものか。

少し難しい言葉や表現もあって、分かりにくいかもしれません。

「絵死」とは、自分で自分の命を絶つこと、  
「許婚者」とは、結婚を約束した人のこと、  
「吾子」とは、我が子のことです。

では、なぜ父親は「ふるさと」を隠そうとしたのか。

「けものような鋭さ」とはどのようなものか。

なぜそのようにしてまで隠してきたのか。

「あばかれ」とはどのようなことか。

なぜ友は自らの命を絶ったのか。

自らの命を絶つ心情とはどのようなものか。

友とはどのような存在か。

「告白」するときの心情とはどのようなものか。

人を愛するとはどのようなことか。

結婚まで約束した人、「許婚者」に去られる心情とはどのようなものか。

「吾子よ」の呼びかけの中に、父のどのような思いが読み取れるか。

「胸張って」とはどのような心持ちか。

名のととはどのような心持ちか。

「瞳をあげ 何のためらいもなく」とはどのような心持ちか。

「これが私のふるさとです」と名のらせたい親の思いとはどのようなものか。

このようにして考えれば、考えてももらいたいことはいくらかでも浮かんできます。いくら時間があってもたまりません。

この詩が書かれたのは、今から60年以上も前のことです。この詩が発表された冊子「詩集 部落」には、当時を物語る詩が、他にいくつもあります。

高洲 一わたしのふるさと一

## I

ぼうぼうの原っぱ  
はまえんどうやぼうふうなんか生いしげった中に  
ハカンバラとヤキバ(火葬場)があった  
“白砂青松”その美しい浜近く  
日照りになると  
いもも出来ない小高い砂地だった  
弓なりの浜の美しさは日本一だが  
白砂での百姓の貧しさもそれにおとらぬ

男は  
近くの水呑百姓の手伝い男

女は  
手をカサカサに荒らし  
夜なべにぞうりを作って飯をかしいだと言う

そんな不毛の地に住まされた先祖たちの  
あえぎが今も僕の体を  
呪いのように ひそかに流れている

トック トック と  
音立てて血管で息づいている

「高洲」とは、丸岡さんの故郷です。私は、「はまえんどう」とか「ぼうふう」という草花があることを知りませんでした。「ハカンバラ」や「ヤキバ」、「白砂青松」も、どういったものか分かりませんでした。でも、「高洲」に行ってみると分かってくるのです。



本当にきれいな砂浜と、青々とした松林の広がる景勝地。にもかかわらず、そこでは部落差別によって本当に苦しい生活を余儀なくされてきた人たちの営みがありました。

この写真の左奥、遠くに小さく工場群が写っています。そのことについて書かれた詩が、「II」です。

## II

また聞かねばならない  
学校の卒業期が近づいたので  
あねえに優秀じゃったのに  
コウバのシケン  
あの子もだめじゃったげな  
やっぱし  
ああ  
「やっぱし」と

武田薬品 八幡製鉄 日特管 日立 日石 鋼板

徳曹 出光 e t c エトセトラ……………  
ぎっしり並んだ工場地帯  
そのどまん中に位置しながら  
“たかす”にはたった一人の臨時工さえない  
二百戸の家並みがひしめき  
働きざかりの若者がきょうも  
仕事にあぶれているというのに

就職差別があったがゆえに、貧しくならざるを得ませんでした。すべての根源は部落差別でした。また結婚について書かれた詩もあります。

### 結婚式

花むこは  
ふた親りっぱにそろっているというのに  
父と母の席は  
空っぽ  
親戚・兄弟・だあれも来てやしない  
一人もいない

そのことに触れはしなかったが  
並んだみんなが知っていた  
その空っぽの席の意味を  
華やいだ式であるだけに  
空席は  
人々の心に  
うずめようのない穴ぼここしらえた  
花むこの故郷では  
母親が云った  
「気だては良うても  
部落とわかっちゃヨメにやでけんし」  
父親が応えた  
「よそん国のオナゴとでも  
いっしょになつてくれたらええのにー  
セガレを一人亡くしたようなもんじゃ」

まったく同じような話を、知り合いから聞いたことがあります。どこか遠いところのお話ではありません。この徳島です。悔しそうに言葉を吐く光景を、私は今も忘れることができません。

こんな丸岡さんの時代の10年後くらいに、部落問題を解決するための国の取組が本格的に始まります。では、今はどうか。

江戸時代の身分制度がなくなって約150年。当事者である被差別部落の人たちが立ち上がった水平社ができて、約100年。丸岡さんの時代から約60年。こんなに時代が進んで、民主主義国家となったにもかかわらず、いまだに大昔の制度を信じる人は、消えていなくなったわけではありません。

今年の春も、昨年の春も、大切な教え子の幸せな結婚式に呼ばれて参列しました。いずれも部落出身の教え子です。中学時代、徹底して人権学習、部落問題学習に取り組んできました。

結婚の話が出たとき、「来たか」とばかりに問います。「部落差別はなかったか」。どちらも、自分のルーツを率直に相手に伝えたうえで、「もうそんな時代じゃない」との言葉をもらって、無事に結婚までたどり着いたと聞きました。どのカップルもそうであってほしいと、心から願いました。

一方で、いまだに恋愛段階で反対されたり、結婚を反対されたりする話を聞きます。すべてが解決しているわけではありません。だから、部落差別をなくしていくための教育はどうしても必要で、大切に取り組んでいかなくてはならないのです。この教育は生きる希望なのです。詩「ふるさと」は、そんな背景、様々な悔しさや悲しさ、怒り、そして未来への希望を感じていなくては、到底理解できないのです。

11月8日(金)には、人権講演会として、弘瀬喜代さんに来校していただきます。数多くの結婚差別に出会い、解決してきた方です。そのお話のなかにも、これから皆さんが生きていくうえで大切にしなければならないヒントがたくさん出てくると思います。しっかり聴いてください。話のあとには、感想や皆さんの思いを述べる時間もあるので、その心づもりもしておいてください。

学年最後の全体人権学習として、私は次のようなテーマを設定しました。

### 「ふるさと」を通して中学生生活をふりかえり、私たちの未来を見つめよう」

11月18日、みんなで語り合う質問は1つだけです。

「ふるさと」のなかで自分に刺さった言葉を通して、大切な友へ、大切な家族へ、大切な故郷へ、自分のなかにある「思い出」を添えて言葉を贈りましょう。また、みんなの発言に言葉を返していきましょう。

「未来」を大切にすることとは、「今」を大切にすることです。大切にすることなくして、「未来」はあり得ません。この時間は、これまで皆さんが辿ってきた人生のなかにある「思い出」を添えて、大切な人に言葉を贈り合う「今」を大切にすることです。また友のそんな言葉に、あなたの言葉を返していく時間です。

自分が書いた文は自分のなかにあるものです。原稿は見なくても発表できます。今回は生きた言葉を届けてみましょう。いくつもあれば、何度でも。

であるならば、言葉は生きた言葉として、相手の目を見て発表することです。それが何人にもなるならば、何回でも発表してください。

以前、元ハンセン病患者の方が若者に、「未来を選べていいなあ」とつぶやいた場面がありました。ハッと気づきます。未来を選べない人生。そんな悲しいことはありません。そんなことがあっていいわけがありません。そんなバカな話があつていいわけがありません。どこに生まれようと、どんな境遇であろうと、人はその人生を思う存分生きるべきです。それができない、許されないことなど、あつてはなりません。

人権学習をするということとは、私は、「自分の翼をもつこと」だと思っています。「翼をください」ではなく、「自ら翼を手にすること」です。自らの自由を手にするということです。そんな学びが、皆さんのなかに染み渡っていけばと思います。

「高洲」に自生するという「はまえんどう」。その花言葉は、「人と違う個性を好きになってほしい」だそうです。真の意味で皆さんが、互いのどんな個性も尊重し合い、好きになれる人になってほしいと心から願います。11月18日、思い出に残る時間にしましょう。